しぶり

第130号

2026年 9月

日本野鳥の会三重　http://miebird.org/

第30回中部ブロック会議in山梨に参加しました

桑名市　近藤 義孝

5月30日・31日に開催された「中部ブロック会議」に、川瀬副代表、笹間事務局長、三曽田理事、そして私の4名で参加しました。公益財団法人日本野鳥の会の関連団体による各地域でのブロック会議は毎年開催されていましたが、コロナ禍の影響で一時中止となっていました。その後、2年前に長野県（日本野鳥の会諏訪支部担当）、昨年は富山県で開催され、今年は富士山麓の富士吉田市にある富士研修所にて開催されました。

今回は17支部と財団、そして興和オプトロニクス株式会社の計19団体・57名が参加しました。

基調講演では、山梨県富士山科学研究所の水村春香研究員から「富士山麓の鳥類と草原ヨタカの不思議な生態」についてお話がありました。ヨタカは鈴鹿山脈でも繁殖期の夜に独特の鳴き声を聞くことができ、繁殖していると推測されます。講演では富士山中腹での繁殖の様子がよく分かり、鈴鹿山脈における繁殖状況を考える上でも大変参考になりました。

写真　中部ブロック会議 会場

その後、各団体からの協議と報告が行われました。諏訪支部からは「ジョウビタキの繁殖分布拡大について」、石川からは「チュウヒの保全活動」と「舳倉島（へぐらじま）の被災支援について」の提案がありました。また、甲府支部から提起された「カメラマンによる野鳥への餌付け問題」については、他地区からも同様の問題が発生しているとの指摘があり、今後の対策を全体で検討していく必要性について議論が交わされました。

翌日は、バスで自衛隊の富士山北演習場へ移動し、早朝探鳥会が開催されました。標高1,000mに位置するため、オオジシギ、ホオアカ、コヨシキ

目次

第30回中部ブロック会議in山梨に参加しました --- 2
表紙の言葉 --- 2
ハシボソミズナギドリ再考 --- 3
2026年春季シギチドリ調査 --- 6
推しの一枚　ホトトギス --- 6
436羽のミヤコドリを観察
(一斉調査で最大の個体数) --- 8
オオヨシキリのくらし --- 9
三重県北勢地方でのハヤブサの繁殖 --- 10
事務局だより --- 11
広がれ！ツバメの子育て見守る輪
～県内2団体に感謝状を贈呈～ --- 12
2026年度　第2回理事会議事録 --- 13
2026年度　日本野鳥の会三重　総会 --- 14
野鳥記録（2026年2月1日から2026年4月16日までに報告があったもの） --- 16
探鳥会予告（2026年10月～12月） --- 19
探鳥会報告（2026年4月～2026年7月） --- 20
編集後記 --- 24

表紙の言葉

スズメ

四日市市　三曽田 明

スズメは地味ということもあり、これまで表紙に登場していなかったようです。身近な鳥の代表として今回描いてみましたが、「スズメといえばこの風景」というイメージから、ノスタルジックな田園風景も合わせて頑張って描きました。今どきはこうした光景もすっかり見られなくなりましたね。絵を通じて、どこか懐かしいぬくもりを感じていただけたらうれしいです。

写真　富士山北演習場での探鳥会

リ、ノビタキ、カッコウなど、高原で繁殖する鳥たちを観察することができました。この演習場に入るには、500円で2か月間有効の入場券を購入します。演習中は立ち入り禁止となりますが、非常に貴重な所でした。

富士研修所に戻った後、2日目の協議が行われました。公益財団法人日本野鳥の会からは、ゴミ拾い探鳥会の開催要請や、「モニタリングサイト1000」の調査員募集などについての話がありました。

最後に、次年度の開催県が三重県となるため、私から開催県の幹事（ホスト）として挨拶を行い、閉会となりました。

ハシボソミズナギドリ再考

津市　平井 正志

2026年5月末、三重県内伊勢湾岸の各地で、ハシボソミズナギドリの死体が多数波打ち際に打ち上げられ、鳥仲間で話題となった。特に稀な現象ではないが、毎年起こるわけではない。中には衰弱した鳥を助けようとの動きもあったと聞く。著者は以前に本誌に拙文をよせたが、あれからかなりの年月が経っている　(平井：2024)。ハシボソミズナギドリに関する情報も更新されていることであろう。再び、筆を執った。

写真1　浜辺にうちあげられたハシボソミズナギドリ

我々が日ごろ目にしているスズメなど陸鳥やシギなどの水鳥、これらとは全く違った鳥がオオミズナギドリ、ハシボソミズナギドリなどの海鳥である。三重県内でもオオミズナギドリが離島で繁殖するが、陸上から観察できる機会はほとんどない。彼らは陸地に近寄ることは繁殖地以外ではまずない。著者は京都舞鶴湾の冠島でオオミズナギドリを調査したことがある(平井：2020)。

彼らは繁殖地の地上では歩くのはのろく、人が容易につかまえることができる。また、狭い地面からでは飛び上がることもできない。しかし、海上では波によって生じるわずかな上昇気流を利用して、羽ばたきを加えた滑空で、海上を見事に飛び続ける。あの長い翼がそれを可能にしている（写真1）。

また、生まれて海に出た幼鳥は3年間は海の上で生活し、繁殖地へすら戻らない。4年目から戻り始め、繁殖に加わる。餌はオキアミ類などであり、海で得られる。夜は海の上に浮かんで波に揺られて寝るのであろう。ハシボソミズナギドリの飛行経路を見ても、陸地の近くを選んで飛ぶということはない (Bool et al.: 2024)。海こそ彼らの棲家なのであり、陸地は邪魔な存在なのかもしれない。

ハシボソミズナギドリの繁殖地は南半球、オー

ストラリア南西部、およびタスマニア島近海の離島である。日本で繁殖するオオミズナギドリと同じように、地面に巣穴を掘り、産む卵は1個だけ、20年近く生きる長命な鳥である（Skira：1991)。繁殖期、南半球の夏にだけ、離島に上陸し、それ以外は一切陸地に近づかない。個体数は極めて多く、正確な測定はされていないが、1,200万羽あるいは2,300万羽との推定がある（Skira：1991、Silva et al.: 2025)。ちなみに、日本近海のオオミズナギドリは430万羽と推定されているので、ハシボソミズナギドリの個体数は桁が一つ多いことになる (Mlodinow et al.: 2026)。非繁殖期の行動はGLS global location sensor (GLS)(注1)を鳥に付けて追跡されているが、オーストラリア近海から、太平洋のほぼ中央を北上し、北太平洋、オホーツク海、ベーリング海まで達し、北半球の夏を過ごす。一部はベーリング海峡を通過し、北極海の一部、チュコト海まで入る。秋には南下し、再び、オーストラリア近海の繁殖地に戻るという、長大な移動をする(Bool et al.: 2024）。この長大は渡りの中で、一部が日本近海を通過するようである。著者が春と秋、太平洋フェリーで名古屋、苫小牧を往復していた時に見るミズナギドリ類はオオミズナギドリとこのハシボソミズナギドリであった(平井：2024)。

ハシボソミズナギドリの死体が大量に打ち上げられる現象は三重で、2003年5月にも観察され、「しろちどり」に掲載されている(岡　2003)。大量死の原因は餌の不足のようである(岡　2011)。今回の大量死で、海岸にうちあげられた鳥を拾得し、はく製を何体も作っている三重総合博物館 学芸員稲垣玲弥氏によると鳥の胸はげっそりと痩せていたとのことである。やはり餌不足による餓死であったようだ。この鳥は主に甲殻類の仲間のオキアミ類を食べるという。海上でのオキアミの棲息など餌の分布は不均一で、時として、餌の乏しい海面に遭遇することがあり、大量死につながるのであろう。大洋の真ん中で大量死が起っても、それに人が気づく可能性は、低い。日本近海で起った場合はしばしば大量に死体が浜にうちあげられ、記録されることになる。

さて、今回の三重での大量死はどれくらいの規模であったのだろう。調査距離と死体数が判明している鈴鹿市北長太海岸、及び津、豊津浦、町屋浦、および村松海岸のデータに基づいて、ごくおおざっぱに推算した。やや荒っぽいが、海上に浮かんでいた個体までも落鳥したと想定すると平均すると14羽/ km となる (表1)。西岸全体を100 kmとすると1,400羽。知多半島側の記録はないが、同数と考え、合計で2,800羽となる。しかし、これを前述の全世界の個体数の0.02%　程度にしかならない。海鳥は様々な脅威を受けている。餌不足以外にも、強風による骨折、各種の捕食者による捕食などがあろう。今回の件はこの鳥にとっては通常の死亡率の範囲ではなかろうか。

海鳥の繁殖地では、しばしば問題になるドブネズミなど外来捕食者の影響はどれくらいあるのだろうか？ドブネズミは船に住み着き、世界各地の離島に広まり、海鳥の繁殖地ではヒナや卵を捕食する。オオミズナギドリの繁殖する三重県の紀北大島でも、ドブネズミが住み着いており、環境省による駆除が取り組まれているが、十分な成果が上がっていない(平井：2021)。膨大は数のヒナが

表　伊勢湾岸にうちあげられたハシボソミズナギドリ (2026/5/24-26)

	調査日	死体数	生存個体	合計	調査区間（m）	観察者
北長太海岸	5月24日	58	0	58	1500	鈴木健真
芸田海岸	5月25日	0	2	2	1580	笹間俊秋
豊津浦	5月26日	22	0	22	680	平井正志
町屋浦	5月26日	2	0	2	480	平井正志
村松海岸	5月24日	0	13	13	2700	中村悦子・濱屋勝則・西村泉
合計				97	6940	
平均/km				14.0		

生存個体は波打ち際付近海上で観察された個体
なお、会員外の方からも情報があるが、識別など不明なため、割愛する。

いるからといっても、ドブネズミもネズミ算で増える。南半球のハシボソミズナギドリの繁殖地での実態を知りたいものである。

この鳥にとってもうひとつ、脅威がある。Matton Birdingである。オーストラリア、ニュージーランドにおいて、繁殖地でヒナがMatton Bird（羊肉の鳥)として食用、油脂抽出用に捕獲されている。アマチュアによる趣味の捕獲ではなしに、商業的事業となっているという。元々は先住民である、マオリやアボリジニーが伝統的に捕獲してきたのであるが、開拓に入ったヨーロッパからの移民も参加していったようである。むろん、今では捕獲個体数を制限しているようではあるが、影響はないのだろうか？　この件については適当な引用文献がみつからなかった。やむをえず、Wikipediaを引用しておく（著者不詳（掲載年不詳））。

今回伊勢湾で、ハシボソミズナギドリが多数落鳥した。しかし、生き延びた鳥は今も北へ向かって飛び続けていることだろう。今頃はオホーツク海だろうか？　ベーリング海だろうか？それとも北極海に達しているのだろうか？いずれにしても、島影のない大海原を飛び続けていることであろう。

注1　GLS (global location sensor)

時間ごとの光の強さを記録する装置。そのデータから、地図上の位置を割り出すことができる。近年軽量のものが開発され、鳥に装着して、渡りのルートを解析するのに使われる。light level geolocator, light-level logger等、様々な呼び名がある。日本の鳥類研究者の間ではジオロケーターと呼ばれることが多い。データを得るために鳥を再捕獲する必要があるのが、難点であるが。ミズナギドリ類は同じ巣穴に戻る確率が高く、GLSが威力を発揮しやすい。

謝辞：ハシボソミズナギドリの調査結果を提供していただいた。笹間俊秋、鈴木健真、中村悦子、西村泉、濵屋勝則の各氏にお礼を申し上げる。

引用文献

岡奈理子　(2011)　ハシボソミズナギドリのストランディング（漂着）現象について.

https://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/hashibosomizunagi/hasibosomizunagi.html

岡八智子（2003）ハシボソミズナギドリ大量死顛末記．しろちどりNo. 40 p13.

平井正志(2020)　オオミズナギドリの思い出。しろちどりNo.104: p 6-7.

平井正志(2021)　紀伊長島大島の鳥とドブネズミ　しろちどりNo. 107 p 2-3.

平井正志（2024）ハシボソミズナギドリの思い出．しろちどり No. 122　p10-11.

Bool, N., M. D. Sumner, M.-A. Lea1, C. R. McMahon, and M. A. Hindell (2024) Hierarchical foraging strategies of migratory short-tailed shearwaters during the non-breeding stage. Marine Biology 171:104

Mlodinow, S. G., P. Pyle, and P. F. D. Boesman (2026). Streaked Shearwater (Calonectris leucomelas), ver. 2.0. In Birds of the World (B. K. Keeney, Editor). https://doi.org/10.2173/bow.strshe.02

Silva, N. De A. E., J. Monk, P. Bustamante and J. P. Y. Arnould (2025) Estimating the breeding population size of the short-tailed shearwater using a nesting habitat suitability model. Frontiers in Marine Science 27 June 2025. DOI 10.3389/fmars.2025.1599553

Skira, I., (1991) The short-tailed shearwater. A review of its biology. Corella 15: 45-5

著者不詳（掲載年不詳）　https://en.wikipedia.org/wiki/Muttonbirding　(2026/5/29閲覧)